

〈提 題〉

トマス・アクィナスにおける「ストア派」(Stoici) の使用法

加 藤 和 哉

「ストア派倫理学と中世哲学」と関わりという観点から「スコラ学における受容と変容」を論じるという課題に対して、この論考はかなり方法的に限定されたものである¹⁾。まず、ここで考察されるのはもっぱら、トマス・アクィナスにおいて、「ストア派」(Stoici) という名称のもとで何が理解され、どのように扱われているのかということにとどまる。逆に言えば、トマスが「ストア派」という名称と結び付けていないものは、たとえば思想史ないし比較思想の観点から「ストア的」と認定されるようなものであっても、さしあたり考察対象としないということである。そもそもトマスは、わずかな例外を除いて、歴史的に「ストア派」に数えられる哲学者のテキストに直接ふれたわけではない。トマスの「ストア派」理解は、キケロやアウグスティヌスといった古代の著作家のテキストを源泉とするものであり、したがってまた当然のように、それら著作家の「ストア派」理解に基づいたものになっている。以上のような制約のもとで、トマスが「ストア派」をどのように理解し、彼の倫理的考察においてどのように「使用」しているのかをテキストに即して明らかにすることが本論考の意図である。

I. 『神学大全』における「ストア派」の使用法²⁾

(1) 「ストア派」の使用例

電子的検索 (Index Thomisticus) を利用して、『神学大全』における

1) 本論考は、昨年度の大会における発表草稿を基本としつつ、当日の討議の内容も踏まえた手直しを加えたものである。本文・引用中の出典表記において、著者名なしにあげたものはトマスの著作である。

2) 大会時の提題では、トマスの神学テキストにおける「権威」(auctoritas) の扱い

「ストア派」(Stoici) という語の使用法を検索すると興味深いことが明らかになる。それは『神学大全』において「ストア派」が使用されるのは、ほぼ「倫理的考察」の場面に限られるということである。すなわち、第I部0回、第II-I部19回、第II-II部6回、第III部5回の使用例が見られるが、第III部の箇所も、すべてキリストの情念が論じられる箇所であり、それらは第II部の議論を前提としたものになっている³⁾。

では、「倫理的考察」における「ストア派」の使用法にはどのような特徴があるのか。第II部において「ストア派」への言及がなされる箇所を、そこでとりあげられる主張に着目して整理すると、以下のようになる。

- ① すべての情念は悪しきものである (*Summa Theologiae* (ST), IaIIae, q. 24, a. 2-3; q. 34, a. 2-3; IIaIIae, q. 158, a. 1, ad 1; IIIa, q. 15, a. 4, ad 2; a. 6, ad 2)。
- ② 有徳な者は情念を有しない (ST, IaIIae, q. 59, a. 2-3; IIaIIae, q. 123, a. 10; IIIa, q. 15, a. 6, ad 2; q. 46, a. 6, ad 2)。
- ③ この世の善は、人間の善ではなく、この世の悪も人間の悪ではない (ST, IaIIae, q. 125, a. 4, ad 3)。
- ④ すべての罪は同等である (ST, IaIIae, q. 73, a. 2)。
- ⑤ 技術や知識には大小がありうるが、徳には大小はない (ST, IaIIae, q. 52, a. 1; q. 66, a. 1)。

このように「ストア派」の主張として言及される回数が多いのは、まず、現在でも「ストア派」の倫理学説としてよく知られる⁴⁾、情念をすべて悪

方について触れ、「ストア派」の使用法をもそのうちに位置づけようとした。しかし、特定質問者が正しく指摘したように、トマスにおいて、「ストア派」は聖書記者、アウグスティヌスなどの教父、アリストテレスなどの哲学者などと同等の「権威」として扱われているとはいえない。この問題は、改めて考究を必要とするものであるので、本稿では割愛した。

3) 他の体系的神学著作についてみると、『命題集注解』4巻中では、わずかに2回の使用がみられるのみで、文脈としては、『神学大全』と同様倫理的な考察の場面である。すなわち、「すべての罪が同等である」という主張が取り上げられる箇所 (*In Sent.* II, dist. 42, q. 2, a. 5, c.)、および快樂論の三つの立場が①エピクロス派、②プラトン派とストア派、③アリストテレスとペリパトス派とに分類されている箇所 (dist. 49, q. 3, a. 4, qc. 3, c.) である。他方、『対異教徒大全』で「ストア派」が言及される6箇所は、すべてが第3巻で「神的摂理」(*divina providentia*) が論じられる際に、ストア派の宇宙論的決定論が批判的に言及される箇所である (*Summa contra gentiles*, III, cap. 73; 84-85, 95)。並行する問題は、『神学大全』第I部でも扱われるが、ここでは「ストア派」への言及はなされていない。このような異同も興味深いのが、いまは指摘するにとどめておく。

4) 歴史的にはむしろ、いわゆる「ストイック」(stoic) という言葉に代表される通説的・通俗的な「ストア派」像が、中世から近世を経由して成立したものであるというべき

として退ける立場 (①) であり、またそれと連動する、有徳者 (virtuosus) には情念はないとする立場 (②) である。これらはいわば、トマスの「ストア派」理解の中心をなす二つの主張であると言ってよいだろう。以下、この二つの主張に関わる箇所を中心に、考察したい (この世の善悪は、人間の善悪ではないという主張③も、後で見るように、二つの基本主張に結びつけられている)。

Ⅱ. アウグスティヌスの「ストア派」理解とトマス

(1) 『神の国』における「ストア派」理解

では、なぜトマスにとって、「ストア派」のこれらの主張が問題であったのだろうか。一連の箇所を見て最初に明らかになることは、トマスは、「ストア派」の基本的な評価について、アウグスティヌスの『神の国』第9巻第4～5章、ならびに第14巻第2章以下における「ストア派」理解に依拠しているということである。

『神の国』第9巻第4章～第5章は、異教徒、特にプラトン派 (アプレイウスなど) のダイモン論を批判する途上で、ギリシア語 *πάθη* とそれに該当するラテン語 *perturbatio* (キケロの訳語)、*affectus*, *affectio*, *passio* (アプレイウスの訳語) などが論じられる箇所である。

そこでは、知者にも、これらの「情念」(*passio*) があること、ただし「適正な仕方では理性に服従したもの」としてあるという説が「プラトン派」と「アリストテレス派」すなわち「ペリパトス派」との共通の説として紹介される。これに対して、「ストア派」は、こうした「情念」が知者にあることを否定したとされるが、それはことがら自体に即してというよりは、言葉の上での対立に過ぎないという、キケロの『善悪の終極について』*De finibus bonorum et malorum* の主張が紹介される⁵⁾。そしてその見解は、「ストア派」の哲学者が、他の哲学者たちが善と呼ぶ「身体の快、外的な快」を善と呼ぶことを欲さないということからくると説明される。さらに、

だろう。

5) Augustinus, *De civitate Dei*, IX, 4, 1. Cf. Cicero, *De finibus bonorum et malorum*, IV, 26, 72; III, 12, 41. キケロの同書第3巻、第4巻は、ストア派とペリパトス派の見解の差異が言葉だけによるものか、ことがら自体に基づくのかという点をめぐって対話がなされている。一方の話者「キケロ」が言葉だけの相違に過ぎないものに対して、論争相手「カトー」はそうではないと主張している。「キケロ」は、ペリパトス派の祖アリストテレスも、ストア派のゼノンの師ポレモンも、プラトンの弟子である以上、彼らの間に見解の相違はないはずだと論じている (IV, 2)。

アウグスティヌスは、アウルス・ゲリウスの『アッティカ夜話』の中で語られるストア派の哲学者のエピソードを援用して、このキケロの理解に賛同する意見を述べている（第4章）⁶⁾。

ついで、聖書の「情念」論が扱われ、聖書においては、神を信ずるものの精神が怒り (ira) や悲しみ (tristitia) や怖れ (timor) を感じるとされることや、またあわれみや同情 (misericordia, compassio) もまた理性に従っているものと考えられる限りで正当であるといったことが論じられる（第5章）。

この箇所におけるアウグスティヌスの意図は、「情念」を否定しないキリスト教の人間の理想像が、哲学者たちの徳の理想と一致すること、しかもプラトン、ペリパトス派だけでなく、さらに見これを否定するかに見える「ストア派」とも実際には一致することを示すことである。

次に、第14巻の箇所は、パウロなどが述べる「肉に従って生きる」と「霊にしたがって生きる」との区別が論じられる箇所である。この二つの生き方を「エピクロス派」と「ストア派」とに重ねる誤解を戒め（第2章）、「ストア派」の「エウパテイア」(εὐπάθειαι/キケロ訳 constantiae) と、聖書における正しい感情 (affectus) の違いが論じられる。「ストア派」の見解については、キケロの『トゥスクルム荘対談』*Tusculanae Disputationes* が参照されている。それによると四つの基本感情のうち、願望 (cupiditas)、楽しみ (laetitia)、恐れ (metus) については、知者のうちにも、それぞれ「エウパテイア」として、意志 (voluntas)、喜び (gaudium)、慎重 (cautio) があるとされる。他方、痛み (aegritudo) ないし苦しみ (dolor) (アウグスティヌスの用語としては「悲しみ」(tristitia)) は患者だけのものであり、これに対応する「エウパテイア」は知者にはないとされる（第8章）⁷⁾。これに対して、アウグスティヌスは聖書の用語法を検討して、そこではこれらの単語が区別なく用いられていることを確認し、むしろ、善い人も悪しき人も四つの感情を有すること、ただし善い人は善い仕方、悪しき人は悪い仕方を持つということを主張し、そこからストア派の「アパテイア」概念にも批判を加えている（第9章）⁸⁾。

6) Augustinus, *De civ. Dei*, IX, 4, 2.

7) Augustinus, *De civ. Dei*, XIV, 8, 1.

8) Augustinus, *De civ. Dei*, XIV, 9, 4.

(2) トマスの情念論における「ストア派」

さて、『神学大全』において「ストア派」が登場するいくつかの箇所、トマスは、このアウグスティヌスの説明を用いている。たとえば、快楽が論じられる第Ⅱ-I部第24問題では、ストア派とペリパトス派の違いは言葉の上でのことだというアウグスティヌスの『神の国』第9巻の説明が引用され、ほぼそのまま用いられている⁹⁾。「ストア派」と「ペリパトス派」の相違は、ことがら (res) の上での違いではなく、言葉の上のことに過ぎないという説明は、ほかにも数箇所繰り返されており¹⁰⁾、トマスはこのアウグスティヌスの「ストア派」理解を受け容れているということができよう。

おそらく、このアウグスティヌス的な「ストア理解」およびそれと対になっている「ペリパトス派」理解は、この問題の考察において、中世思想全体にとって共通の理解枠組みであったのではないか¹¹⁾。実際ことがらとして考えても、人間の善、有徳な生のあり方における情念の位置づけの問題は、キリスト教的人間像の根本問題として譲れないものであった。トマスがこれを継承していることに不思議はないだろう。しかし、それだけではない。

Ⅲ. 「哲学者」(Philosophus) 対「ストア派」(Stoici)

(1) アリストテレスの快樂論とトマスの「快樂」論

トマスにとって、この「ストア派」理解の問題は、単にアウグスティヌスの理解を継承しただけにとどまらず、かれ自らの神学的倫理学、すなわち、アリストテレスに依拠して展開される倫理的考察の根幹にかかわる問題として意識されているのである。実際、「ストア派」への批判的評価は、アウグスティヌスに依拠しているにしても、「ストア派」学説について展開される理解や批判自体は、必ずしもアウグスティヌスにそのまま依拠しているわけではない。

たとえば、先に触れた第Ⅱ-I部第24問題第2項においても、「ストア派とペリパトス派の違いは全く無い、わずかである」という主張自体は、アウグスティヌスに依拠するのであっても、その説明として与えられてい

9) ST, IaIIae, q. 24, a. 2. Cf. Augustinus, *De civ. Dei*, IX, 4, 1; 3.

10) ST, IaIIae, q. 59, a. 2, c.; IIaIIae, q. 123, a. 10, c.

11) Albertus Magnus も『命題集注解』で、アウグスティヌスに依拠しつつ、同様の理解を述べている。Albertus Magnus, *In Sentent.*, III, dist. 36, art. 1.

ることは、必ずしもアウグスティヌスによるものとはいえない。トマスはここで「ストア派」がそういう主張を行った理由を、「彼らは感覚と知性を区別せず、したがって、感覚的欲求と知性的欲求とを区別しなかった」ということから説明している¹²⁾。この説明は、そこで用いられている用語などの点で、アウグスティヌスのものではなく、トマスが『神学大全』第Ⅰ部で扱い、第Ⅱ部でも用いている人間論に基づくものである。

このように、トマスにおいては、アウグスティヌスの「ストア派」理解が、トマス自身の倫理的考察（それは多分にアリストテレスを使用している）に結び付けられているのである。

(2) トマスの情念論における「ストア派」

同様のことは、情念論の中心テーマの一つである快樂論の考察においても見られる。トマスは「快樂」(dilectatio)を論じる第Ⅱ-I部第34問題の冒頭3項を次のような問いに当てている¹³⁾。すなわち、第1項「すべての快樂は悪であるか」、第2項「すべての快樂は善であるか」、第3項「何らかの快樂は最善であるか」である。

これらを通じて、①「すべての快樂は悪である」(第1項)、②「すべての快樂は善である」(第2項)、③「いかなる快樂も最善ではない」(第3項)という三つの立場が検討されて否定され、④「快樂には善も悪もあり、しかもある快樂は最善である」という立場が確立される¹⁴⁾。そしてこの道筋は、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』第7巻の快樂論でたどっている道筋と基本的に同じである。アリストテレスはこの考察を経由して、「最高善・幸福」がある種の快樂(もっとも快い、最善の活動)にほかならないことを主張するが¹⁵⁾、それは人間の最高善たる「至福」(beatitudo)についてのトマス自身の立場でもある¹⁶⁾。

ところで、アリストテレス自身は『ニコマコス倫理学』の当該箇所ではこれら三つの立場に具体的な唱道者を言及していないのに対して、それを下敷きに書かれているトマスの『神学大全』では、これらの見解が①「ス

12) ST, IaIIae, q. 24, a. 2, c.; q. 59, a. 2, c.; IIaIIae, q. 123, a. 10, c.

13) 興味深いことに、トマスの「快樂」論は内容的には第24問題の情念一般論を踏まえてはいるものの、第34問題の第1~3項では、アウグスティヌスへの参照なしに、アリストテレスに依拠して議論が展開される。

14) ST, IaIIae, q. 34, a. 1, c.; a. 3, c.

15) Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, VII, 13, 1153b15.

16) ST, IaIIae, q. 3, a. 4, c.; q. 4, a. 1, c.; q. 34, a. 3, c.

トア派の或る人々」(aliqui Stoicorum), ②「エピクロス派」(Epicurei), ③「プラトン」(Plato) に割り当てられているのである。もちろん, この同定は, 通時的に理解された哲学史理解に基づくなら, よりあとの時代の学派の学説をアリストテレスのテキストに読み込むものであり, 間違いである。しかし, アウグスティヌスによる古代哲学理解を知っているトマスからすれば当然の同定であり, またことがらそのものとして考えても自然な割り当てといえるであろう¹⁷⁾。

(3) アリストテレス倫理学における「ストア派」(Stoici) 批判

さらに, トマスはアリストテレスの『ニコマコス倫理学』の注解においても, 同様の「ストア派」理解にたびたび言及しているのである。トマスが, 同注解において, 「ストア派」に言及している箇所は, 全部で9箇所ある。そして, 1箇所を除きすべてが「ストア派」に批判的な言及である¹⁸⁾。そしていずれの箇所でも, トマスは, アリストテレス自身の見解を「ストア派」と対立するものとして理解している。それぞれの箇所での批判の対象となっているのは, 以下の学説である。

(a) 「無感受状態」(アパテイア) の問題

①有徳者の幸福と不運の関係 (アリストテレスのテキスト *Ethic. Nic.*, I, 10, 1100b22-33/ トマスの注解 *In Ethic.*, I, lect. 16, n. 9-10, 以下同様。

() 内のラテン語はメルベケのギレルムスによる翻訳のものである)

この箇所は, 第1巻の幸福論の末尾に当たる箇所である。プリアモスなどの事例を念頭に, いかにも有徳な人物であっても大いなる不運に見舞われた場合には幸いであるとはいえないが, それでも, そういう人間が度重なる不運を「無感覚」(insensibilitas) のゆえにではなく, 高貴さのゆえに耐え忍ぶなら, そこには美が輝き出るという, アリストテレス倫理学のいわば究極の言葉である。トマスは注解において, この「無感覚」を「ストア派」の主張として理解し, そこに, 「ペリパトス派」と「ストア派」の

17) ただし, これを「クロノロジカルな誤読」と判定するのは, むしろ現代の哲学史研究からするアナクロニズムであろう。トマスにとって「権威」の扱いにおいて, クロノロジカルな問題意識はそもそもなかったと考えられるからだ。

18) 例外は, 『ニコマコス倫理学』第2巻でいわゆる「徳の中庸」を確立する方法が論じられる箇所である (Aristoteles, *Ethic. Nic.*, II, 9, 1109b1-7)。そこで区別される二つの方法について, アリストテレスは具体的な主張者に言及していないが, トマスはそのうちの一つは, 「ストア派の方法」(via Stoicorum) だと述べている (*In Ethic.*, II, lect. 11, n. 8)。

見解の違いを見出している。また、トマスは、「ストア派」が有徳者に悪が生じ得ないとする理由は、身体的な善・外的な善にいかなる意味でも人間の善をおかなかつたからだという、アリストテレスがここでは触れていない説明を付加している。

②徳と快苦の関係 (*Ethic. Nic.*, II, 3, 1104b24-26/ *In Ethic.*, II, lect. 3, n. 8¹⁹⁾)

この箇所は、人がらをあらわすしとしての快苦を扱う箇所であり、そこから徳が快苦をめぐるものであることが結論づけられる箇所である。そこから、アリストテレスは、徳を「無感受状態」(*impassibilitas*)ないし「静けさ」(*quies*)とする「あるひとびと」の定義を紹介し、批判している。トマスは、その「ひとびと」は「ストア派」であると説明している。

③怒りの不足の性向 (*Ethic. Nic.*, IV, 5, 1126a3-6/ *In Ethic.*, IV, lect. 13, n. 5)

この箇所では、怒りに関わる徳である温和に対して、怒りの不足の性向として「怒り知らず」(*inirascibilitas*)が触れられている。アリストテレスはこの怒りの情念の不足もまた、非難されるとし、そういうひとは、「ものを感じる」(*sentire*)ことも、「苦痛を感じる」(*tristari*)こともないと述べる。トマスは、このアリストテレスの議論を「すべての怒りは非難されるべきものである」とする「ストア派」に対する反論と解している。

(b) 「外的善」「幸運の善」と幸福の関係の問題

④善の区別 (*Ethic. Nic.*, I, 8, 1098b12-18/ *In Ethic.*, I, lect. 12, n. 4-5)

この箇所は、最高善の探求の途上で、善に、外的な善、身体の善、魂の善の三種があることが確認され、そのうち魂の善がもっとも優れた意味で善と呼ばれるのに相応しいといわれるところである。アリストテレスは、それはすべての「哲学者たち」(*philosophi*)の古くからの見解と同じであると述べる。トマスは、その箇所にわざわざ注釈して、ただし、それ以外の善(外的な善と身体の善)については、「ストア派」と「ペリパトス派」の考えは違っているということを付け加え、両者の見解の違いについて詳細な説明をしている。

⑤勇気と死の悲しみ (*Ethic. Nic.*, III, 9, 1117b9-13/ *In Ethic.*, III, lect. 18, n. 6)

19) *ST*, IaIIae, q. 59, a. 2, c.

この箇所は、勇気の徳をめぐって、勇氣ある人が死を恐れるかどうか、問題にされる箇所である。そして、勇氣あるものは、それがなすべきことである場合には、死や負傷を耐え忍ぶが、しかしそうはいつでも、かれがまったき徳を有し、優れて幸福なひとである限りは、死に関して苦痛を覚えると述べる箇所である。トマスは、この箇所で、アリストテレスが否定しているのは、「有徳者は悲しみを有さない」とする「ストア派」の見解であると説明している。

⑥快樂と幸福と外的な善 (*Ethic. Nic.*, VII, 13, 1153b17-21/ *In Ethic.*, VII, lect. 13, n. 10)

この箇所は、第7巻の快樂論の締めくくりとして、最高善がある種の快樂であること、そこからして、幸福な生活とは快い生活であるという点で万人が一致することはもっともであることが主張される箇所である。アリストテレスは、そのことからさらに、幸福なひとは身体の善や外的な善をもあわせ要することを主張する。そして、拷問を受けたり、大きな不運に落ちこんだりしている人でも、その人が善い人でありさえすれば、幸福であるという人々の見解を批判している。トマスは、ここでアリストテレスが批判しているのは、「ストア派」の見解であると注釈している。

⑦幸福論再論 (*Ethic. Nic.*, X, 6, 1176a33-b2/ *In Ethic.*, X, lect. 9, n. 3)

この箇所は、第10巻の幸福論の冒頭で、幸福が性向ではなく、活動であるという第1巻の結論が再確認される箇所である。そして、性向であるとする場合の不都合として、その場合には、眠っている人や、この上ない不運に陥っている人でも幸福であることになるという、先の①や⑥の箇所でも触れられた不都合が指摘される箇所である。トマスはまさに、それが「ストア派」の主張であったと述べている。この箇所でも「ストア派」の二つの基本主張(a)「有徳者は(悪しき)情念を有さない」というアパテイアの考え(特に、悲しみや苦しみの存在の否定)と、(b)「身体的善・外的な善は人間の幸福の条件ではない」という主張とが結びつけられている。

トマスはこの注解においては、アウグスティヌスに言及してはいないが、そこで述べられている「ストア派」と「ペリパトス派」の違いは、『神の国』第9巻第4章の記述と基本的に同じである。アウグスティヌスによれば、「ストア派」が四つの基本的情念のうち、悲しみや苦しみだけについて対応する「エウパテイア」を認めない根拠は、知者にとっては、失いのような(したがって、その喪失が悲しみやくるしみの源となるような)

「身体の善」「外的善」は善ではないということだったからである（前記Ⅱ(1)参照）。

古代哲学者「アリストテレス」とアウグスティヌスの間に、見解の一致が見出されているということ私たちはどう受け止めるべきなのか。いまここで十分な検証を行う余裕は無いが、次のような道筋を想定することができるだろう。

- (ア) キケロの「ストア派」「ペリパトス派」理解において、キケロはアリストテレス『ニコマコス倫理学』に特に言及しないものの、上記の問題についてのキケロの理解は『ニコマコス倫理学』に一致している。アパテイア批判、ならびに身体的善・外的善を「ストア派」が認めないといった説明は、キケロの『善悪の終極について』にも見られる説明であった。
- (イ) アウグスティヌスがこの理解を継承し、それをトマスがアウグスティヌスから学んだ（トマスが、キケロの『善悪の終極について』を直接読んでいる形跡はさしあたりない。ただし、アウグスティヌスがキケロのこのテキストに言及していることは知っていた）。
- (ウ) トマスは、『ニコマコス倫理学』の読解に当たっても、この理解を用いた²⁰⁾。

こうして、人間の最高善の問題と情念の扱いについて、トマスは、アリストテレス、キケロ、アウグスティヌスの間に見解の一致を見出し、それを自らのものとしたのである。

最後に、トマス自身はこの哲学者たちの見解の一致をどのように見ていたのかを参照しておきたい。アリストテレスは幸福論の末尾で以下のように述べる。

「このようにして、知者たち (sapientes) の意見 (opinionēs) はわれわれの論拠 (rationēs) に響き合う (consonare) ようである。さて、かれ

20) キケロ以前に、アリストテレスのテキストを「ストア派」の批判として読む注釈伝統があったことが推定される。論者はいまのところ、それについて何らの定見も持っていない。さしあたり、トマスが当初用いたとされるロベルト・グロステスト訳『ニコマコス倫理学』に付されていた諸注釈では、これらの箇所を「ストア派」と結びつけるものは見られなかった (*The Greek Commentaries on the Nicomachean Ethics of Aristotle, in the Latin translation of Robert Grosseteste, Bishop of Lincoln, vol. I & II, Leiden, 1973*)。それ以外のギリシア語古注では、「ストア派」に触れたものも見受けられるが、今後の研究課題としたい。

らの意見にも何らか信 (fides) は含まれているが、実践的事柄における真実 (verum) は実践 (opera) と生 (vita) によって判定されるものである。なぜなら、実践と生のうちに決定的なものがあるからである。そこで、われわれは上述のことを、実践と生に適用して考察する必要がある。そして、それが実践と響きあうときにはこれを受け容れ、響きあわない時には、これを単なる言説 (sermones) に過ぎないものとみなすべきである²¹⁾。」

トマスは注解においてこれをなぞって、「語られたことは、知者たちの実践 (opera) と生 (vita) とに比較して考察しなければならない。……そして、それが実践に響きあわない場合には、単なる言説 (sermones) であり、真実を有さないとみなすべきである」と述べ、次のように続ける。「ちょうど、外的なものは人間の善では決してないと述べたストア派の見解について明らかなように。実際、その反対のことが彼らの実践において明らかだからである。というのも、彼らもまた外的なものを欲求し、善として求めているからである²²⁾。」

このアリストテレスの結語は、有徳な人間に情念を否定する「ストア派」の見解は単なる言葉の問題に過ぎないというキケロ・アウグスティヌスの理解と響きあっている。そして、トマスによれば、「ストア派」はかれら自身の言説が自らの実生活を裏切っているがゆえに誤りなのである。とすれば、キケロ、アウグスティヌス、アリストテレスの見解がいずれも人間の現実と響きあうロゴス (ratio)、真なる言説として、互いにも響きあうことには何の不思議もないことになるだろう。

以上のように、トマスにおいて、「ストア派」は、最高善・幸福とは何に存するか、またこれを実現する善き人、すなわち有徳なる人のあり方は何かという倫理的考察の最大の主題に関する主要な論敵として使用されているということができるのである。

21) Aristoteles, *Ethic. Nic.*, X, 8, 1179a16-22.

22) *In Ethic.* X, lect. 13, n. 7.